

## 台湾における早朝レクリエーションに関する研究

### — 台南市での晨間運動を事例に —

○蔡 守浦（中京大学大学院） 守能 信次（中京大学） 永松 昌樹（中京大学大学院）

晨間運動、参加者、台湾

#### 1. はじめに

台湾では「晨間運動」と呼ばれる市民が自発的に行なう早朝レクリエーション活動が、日常的に展開されている。この活動は、早朝、日の出にともなって各地域の公園や小学校ならびに中学校といった各種の公的な施設で実施されており、非常に独特な形式を持つ。こうした活動は、おそらく諸外国ではあまり例をみることのできない日常的な性質を持つレクリエーションの一つであろう。また、晨間運動は中年以降の人々が活動の中心となっており、一般に若者の参加はあまり多くはみられないが、そのことはまた、高齢期に向かう台湾人に対してレジャー・レクリエーション活動の参加を推進するための重要な機会としてとらえることができよう。

この晨間運動は台湾人にとって既に見慣れた活動で、ごく普通の生活のなかで行なわれている。しかしながら、この活動があまりにも一般化されていることが、かえってレジャー・レクリエーション研究のテーマとしてこれまでに取り扱われていない原因となっている。具体的には、晨間運動の参加者がどのような人たちによって成るのか、また、参加者は生活時間のなかで晨間運動をどのように行なっているのか、利用施設と参加者の居住地との地理的な関係はどうか、あるいは参加者の組織はどのように構成されているのか、などといった事柄についても明確に示された資料は存在しない。したがって、晨間運動を題材とした実証的な研究が、台湾のレジャー・レクリエーション研究者によっても、まだ詳細に行なわれていないのが現状である。

本研究の目的は、台南市の中心部で展開されている晨間運動を事例にとり、その活動の実態と参加者の属性を把握することから、具体的な晨間運動の現状を明かにすることにある。特に、今回の研究発表では、晨間運動の内容とその参加者について報告する。

#### 2. 研究の方法

本研究では、台南市の中心部にある晨間運動の活動拠点として、特に、参加者数の多い6つの調査エリアを選んだ。1) 中正記念体育公園、2) 孔子廟、3) 中山公園、4) 成功大学、5) 文化中心、6) 協進国小学校がこれにあたり、図2にある地図上の番号がそれぞれの位置を示している。

調査項目を決定するにあたって、昨年（1991年）の8月に予備調査を実施したうえで検討し、調査票を作成した。

本調査は、1次調査として1992年4月26日～30日の5日間に面接法による個別調査を行なった。面接調査の実施にあたり、事前に面接調査員（15名）に調査のトレーニングを施した。なお、今回、あえて時間のかかる面接法を採用したのは、高齢者のなかに文盲者が含まれることが予測されたためである。

また、8月11日～14日には、2次調査としてエリア内で行なわれている活動の種類や参加状況の観察調査（スライド撮影ならびに参加者概数調査）を行なった。

#### 台湾の概要

総面積約36,000平方キロメートルで九州ほどの大きさの本島と周辺79の島からなる。

人口は約19,700,000人（愛知県のおよそ3倍）

人口密度はバングラディッシュに次いで世界で2番目に高い。

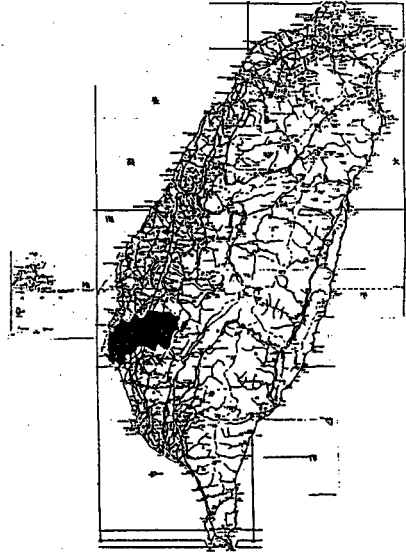


図1 台湾全土と台南市の位置

#### 台南市の概要

総面積175.646平方キロメートル。

人口は689,541人（男性350,800人、女性338,741人）。

（なお、図中に記した番号は表1の調査エリアに該当する）

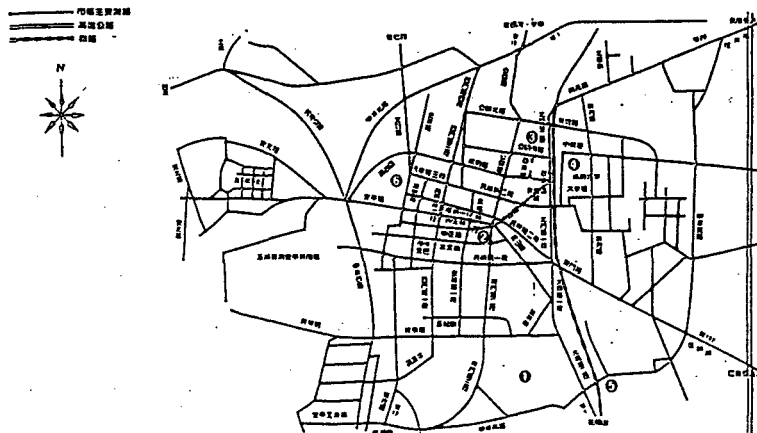


図2 調査エリアの位置

表1 調査エリアの概要

調査エリア	面積（平方メートル）	晨間運動に利用される主な施設
1) 中正記念体育公園	220,000	陸上競技場、テニスコート、公園
2) 孔子廟	9,007	広場
3) 中山公園	140,000	公園内の広場
4) 成功大学	940,000	大学構内の運動施設、道路など
5) 文化中心	27,766	広場
6) 協進国小学校	32,764	校庭、校内運動施設、遊具など

### 3. 結果および考察

面接調査によって回答に応じた参加者の特性と参加頻度を表2に示した。

参加者の年齢構成は、60歳代が全体の3割を占めて最も多く（30.3%）、以下、50歳代（18.2%）、40歳代（14.8%）、70歳以上（14.1%）となっており、40歳以上の中高年者が8割には満たないものの（77.4%）晨間運動の活動の中心層であることが示された。台湾においても若年層のレジャー・レクリエーション行動は、日本と同様に流行や新種の活動への機会が増加しているため、晨間運動のように早朝に行なわれ、しかも自発的に行なわれているものへの参加の比率が低くなっていると推察される。1週間あたりの参加頻度は、「7日」と回答する参加者が最も多く（59.5%）、ほぼ6割の参加者が毎日欠かさずに晨間運動を実施しており、以下「6日」（12.3%）、「5日」（8.3%）と回答者の割合は減少している。この結果は、台南市での晨間運動が日々の生活のなかであって、きわめて習慣性の高い活動として行なわれていることを示唆している。

次に、晨間運動において実施されている活動の種目を表3に示した（複数回答）。

晨間運動への参加者はそれぞれが好きな活動種目を実践しているが、今回の調査によって参加者全体では、公園内の道や広場などを散歩（ウォーキング）する人が4分の1以上で最も多く（25.5%）、また指導者の指示に従って体を動かす健康体操への参加の割合もほぼ同様の割合を示し（24.9%）、次いで、ジョギング（21.2%）の順であった。性別による違いは、女性の活動種目としてダンスが特に参加の割合が高く（15.3%）、男性のダンスへの参加者は7名（1.3%）しかみられない。しかしながら、今回の調査では少なくとも22種目への回答があった。このなかには、これまで晨間運動の代表的な種目であると考えられてきた気功（8.7%）、太極拳（7.7%）、中国固有の武術である国術（2.1%）などが含まれるが、こういった種目への参加率が減少していることは明かであり、この原因として晨間運動における活動の種目が多様化していることと、指導者や施設を必要としない簡易運動への移行があげられる。

表2 晨間運動への参加者の年齢構成と参加頻度

( ) 内は%

	全 体 N=1003	男 性 N=560	女 性 N=443	
年齢層	10歳代	2 6 (2.6)	1 2 (2.1)	1 4 (3.2)
	20歳代	1 0 2 (10.2)	5 2 (9.3)	5 0 (11.3)
	30歳代	7 9 (7.9)	5 4 (9.6)	2 5 (5.6)
	40歳代	1 4 8 (14.8)	7 4 (13.2)	7 4 (16.7)
	50歳代	1 8 3 (18.2)	8 4 (15.0)	9 9 (22.3)
	60歳代	3 0 4 (30.3)	1 8 1 (32.4)	1 2 3 (27.8)
	70歳以上	1 4 2 (14.1)	9 3 (16.6)	4 9 (11.1)
	不明・無回答	1 9 (1.9)	1 0 (1.8)	9 (2.0)
参加頻度 (days/week)	1日	3 4 (3.4)	1 6 (2.9)	1 8 (4.1)
	2日	3 2 (3.2)	2 0 (3.6)	1 2 (2.7)
	3日	7 3 (7.3)	4 1 (7.3)	3 2 (7.2)
	4日	4 1 (4.1)	2 4 (4.3)	1 7 (3.9)
	5日	8 3 (8.3)	4 4 (7.9)	3 9 (8.8)
	6日	1 2 3 (12.3)	7 2 (12.8)	5 1 (11.5)
	7日	5 9 8 (59.5)	3 3 3 (59.4)	2 6 5 (59.8)
	不明・無回答	1 9 (1.9)	1 0 (1.8)	9 (2.0)

表3 晨間運動の活動種目(複数回答;上位5種目)

( ) 内は%

	全 体 N=1003	男 性 N=560	女 性 N=443
1位	散歩(ウォーキング) 2 5 6 (25.5)	ジョギング 1 5 3 (27.3)	健康体操 1 1 5 (26.0)
2位	健康体操 2 5 0 (24.9)	散歩(ウォーキング) 1 5 2 (27.1)	散歩(ウォーキング) 1 0 4 (23.5)
3位	ジョギング 2 1 3 (21.2)	健康体操 1 3 5 (24.1)	ダンス 7 0 (15.8)
4位	バドミントン 1 5 4 (15.4)	バドミントン 9 1 (16.3)	バドミントン 6 3 (14.2)
5位	気功 8 4 (8.4)	太極拳 4 6 (8.2)	ジョギング 6 0 (13.5)